

『身がわりの恋』

著:真崎ひかる

ill:明神 翼

目の前が、明るい……。

重い瞼を開いた途端、あまりの眩しさに右手を上げて目の上を覆った。

「ん、頭……喉も、痛い」

頭の芯がズキズキと鈍痛を訴えているのに加えて、いつになく喉が渴いている。

これは、あれだ。深酒をした翌朝の、典型的な症状。

もともとアルコールに強くない侑矢は、こうして翌日まで影響が残るような無謀な飲み方をすることなど滅多にないので、久々の感覚だった。

昨夜は、なにがあっていつもより多く酒を飲んだ？

「あ……そっか、送別会……」

思い出した。バイト先の居酒屋で、拓海の送別会があつて……足取りが危うい拓海を送るために、マンションを訪れたのだ。

帰ろうとしたら、酔いが醒(さ)めたら話したいことがあるという拓海に引き留められて、泊まらせてもらうことになった。

そして……？

「あ！」

パチンと風船が破裂するような衝撃が走り、一気に記憶が鮮明になった侑矢は、ビクッと身体を震わせた。

深夜、このソファで『酔い』を言い訳に、夢中になって拓海と抱き合った。好きだとうわ言のように繰り返す侑矢に、彼は返事をする事なく……でも、突き離すでもなく、ただ抱き締めてくれた。

勢いよく上半身を起こした直後、クラリと眩(め)暈(まい)に襲われて口元を手で覆う。

「……う」

気持ち悪い。頭がグラグラする。

よみがえったとんでもない記憶が、夢なのか現実に起きたことなのか確かめなければならぬのに、頭が働かない。

うつむいた視界に、スツとミネラルウォーターのペットボトルが映り込む。

「大丈夫？ 急に動いたらダメだ。水、飲んで」

そんな言葉と共に差し出されたものを、深く考えることなく受け取った。

「ん、ありがと」

キャップを開けてあるボトルを震える手で掴み、唇をつけた。コクコクと三分の一ほどを喉に流し込み、大きく息をつく。

今、侑矢がいるのは大きなソファ……直視できないけれど、うつむく視界の隅に映る人影は、この部屋の主……拓海に違いない。

なにがあつたか、自分がどんな言葉で拓海を誘ってどれほどみっともない姿を見せたか、いっすすべて忘れていたらよかったのに。

忌(いま)々(いま)しいことに、そこまで都合よくアルコールは作用してくれないようだ。

「あの、ごめん。僕、……なんか、変な酔い方して、迷惑かけ……たよね」

探るような言い回しになってしまったのは、夜の記憶が現実のものだという確証が持てていないせいだった。

離れたくないと訴えながら縋りつき……べそべそ泣きながら、初めて身に受ける苦痛と快樂に溺(おぼ)れた。

遮る衣類がない状態で感じる自分以外の体温は熱くて、余韻が生々しく肌に残っているみたいだ。

ダメだ。考えるなっ。

記憶を掘り起こそうとしただけで身体の芯がじんわりと熱を帯びる気配を感じ、強く奥歯を噛む。

小さく震える手を握り締めたところで、頭の上から動揺を感じさせない低い声が落ちてくる。

「迷惑はかけられていないけど、身体の具合は悪くない？」

「大丈夫……夫」

うつむいたまま答えた侑矢だったけれど、ふと違和感に気がついた。

拓海は、こんなしゃべり方をする人間だったか？

特に侑矢に対しては、もっと無遠慮で高圧的ともいえる調子で。それは、気を許してくれている証拠でもあるから、嫌ではなかったけれど……。

声は、確かに拓海のものだ。なにより、拓海と自分しかいないはずだ。なのに、ペットボトルのキャップを開けてから手渡してくれるささやかな気遣いにしても、いつもの拓海とはなにかが違う。

ギュッと強くペットボトルを握った侑矢は、恐る恐る顔を上げてソファの脇にいる人影に視線を向けた。

「拓……海、じゃな……い」

ソファの脇、フローリングに腰を下ろして真っ直ぐに侑矢を見ているのは、見慣れた拓海ではなかった。

清潔感のある長さに整えられた髪は、カラーリングなどの手を加えていない黒で……飾り気のないシンプルな白シャツなど、派手な色合いや柄物を好む拓海が袖を通すはずもない。

これは、誰だ……？

なにより、自分が昨夜腕に抱かれたのは拓海だとばかり思っていたけれど、まさか違っていた？

声が出ない。唇が震えそうになり、強く噛んだ。

恐慌状態(パニック)に陥った侑矢が、言葉もなく呆然と目を見開いて凝視していると、その青年は少しバツが悪そうに視線を逸らした。

「おれ、春日広海です。拓海の、弟。覚えてない……？」

その声は、やはり聞き慣れた拓海のものと同様似している。ただ、弟と名乗ったこちらの青年のほうが、ほんの少しやわらかな響きだ。

「広海、くん？ 覚えて……って、忘れるわけないっ。でも、え……なんで」

途方に暮れた響きの『なんで』には、様々な意味合いが含まれている。

確か、拓海の実家は四(し)国(こく)で、広海がこんなところにいるはずがない。

なにより……侑矢の記憶に残る広海は、目の前にいる大柄な青年の姿とはかけ離

れていた。

二年半ほど前、夏休みの数日を共に過ごした少年との違いに戸惑うあまり、思考が置き去りになっているみたいだ。

あの頃の広海は、小柄で大きな目が特徴の可愛らしい少年だったのだ。

外見は可愛いという形容がピッタリでも、聡明さを表すような真っ直ぐな瞳と、よどみないハッキリとした口調で話す大人びた高校生で……奔放で子供のように感情のまま振る舞う兄の拓海とは、外見も内面も見事なまでに正反対のタイプだった。

「侑矢さんと逢ったのは、高一の……夏だったよね。おれ、あの後に急成長したから。身長は三十センチ近く伸びたかな。今は百八十センチくらいある。兄貴には、無駄にデカくなりやがってとか文句を言われてるけど……」

「そ……なん、だ。ビックリ、した」

呆然としたまま言葉を返した侑矢は、視線を泳がせて強く拳を握り締める。

昨夜のアレコレは、酔っ払って願望を投影してしまったリアルな夢だろうか。

そうでもなければ、広海がこんなふうになんか平然としているわけがない。それとも、アレはやはり拓海で……広海はなにも知らないだけとか？

なにかもがあやふやで、どこまで夢でどこから現実なのかハッキリしない。

広海の沈黙は、なにを意味するのだろうか。なにか、なんでもいいからしゃべってくれたらいいのに。

動くこともできずにいると、足音が近づいてきた。

ビクッと肩を震わせて顔を上げた侑矢は、躊躇いと戸惑いを拭いきれないままりビングに入ってきた拓海に目を向ける。

けれど、視線が合わなかった拓海は、侑矢が助けを求めるような目をしていることに気づかなかつたに違いない。

「うー……よく寝た。あ、おまえら顔を合わせたのか。前に逢ってるし紹介する必要はないよな。俺、コンビニで朝飯調達してくるから、広海が話せよ。侑矢、話があるって言っただろ。コイツから直接聞いてくれ」

大きなあくびを零してそれだけ言い残し、あっさり背を向けてしまう。足音が遠ざかり、玄関の扉が開閉する音が聞こえてきた。

あの言い方からすると、侑矢をここに引き留めた理由、勝手に意味深だと受け取った『話』は、広海に関する事だったのだろうか。

自分に都合よく勘違いして、独りでドキドキして……バカみたいだ。

それよりも、昨日のあれが夢ではないとしたら、自分が抱かれたのはどちらの腕なのか……知りたいのに、さっきの拓海の状態からは推し量ることができない。

「侑矢さん」

「ッ……な、に」

咄嗟に動揺を隠すことができなかった。名前を呼びかけてきた広海に答えた声は、みっともなく上擦ったものになってしまう。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>